



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	土屋博 編著「聖と俗の交錯 : 宗教学とその周辺」(北海道大学図書刊行会、1993年)
Author(s)	山我, 哲雄
Citation	基督教学, 30, 43-49
Issue Date	1995-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46557
Type	other
File Information	30_43-49.pdf



土屋博 編著 『聖と俗の交錯——』

宗教学とその周辺』

(北海道大学図書刊行会)

山 我 哲 雄

「あとがき」によれば本書は、「北海道大学文学部宗教学研究室で不定期に開催されてきた談話会」を土壌に生まれたものであり、「宗教学を形づくってきた、また現に成り立たせているいわば『裾野』のところをできる限り明確にしようとする試み」である。「聖と俗の交錯」という書名が選ばれた所以は、全体の編者土屋による「聖俗問題と宗教学の可能性」と題する「序論」に示されている。そこで土屋は、マックス・ミュラーに始まる「独立した学問としての宗教学」の成立と、それ以降の宗教起源論・発展段階論の展開や、宗教社会学、宗教心理学、

宗教現象学等の宗教研究諸領域の発展について手際よくまとめるとともに、従来の宗教学の基本的な考え方が、結局はヨーロッパ的・キリスト教的な神観念を基準に宗教全般を理解しようとするものであり、仏教や日本の宗教などを考察する際に必ずしも適切でないことを指摘する。そして神観念に代わる「宗教現象の最大公約数となるようなキー・ワード」として、デュルケムやオットーによって導入されエリアーデ等によって展開された「聖」の概念を取り上げ、他方で「聖と俗の境界があいまいになつてきたこと、もしくはあいまいになるほどに俗の領域が多彩に展開したこと」を現代の特徴として挙げ、聖俗二分法が「現代状況を解明する糸口」ないし「仕掛け」として有効であるとする。そして再び「あとがき」に戻れば、この「聖俗二分法という仕掛け」を用いて、さまざまな領域を通じて「思想史においても、現代においても、聖と俗が交錯しつつ現れてくるありよう」を浮かびあがらせようと試みたのが、本書なのである。

全体は第一部「思想史における聖なるもの」と第二部「現代世俗社会における聖なるもの」の二部に分かれ、前

者が第一章「歴史意識と宗教」(大道敏子)、第二章「社

会思想と宗教」(宇都宮輝夫)、第三章「科学思想と宗教」

(今井道夫)の三章に、後者が第四章「言葉と宗教」(佐々

木 啓)、第五章「世俗社会と宗教」(櫻井義秀)、第六章

「医療と宗教」(澤田愛子)の三章に分かれている。いわ

ば第一部が通時的・歴史的研究、第二部が共時的・現代

的研究であり、第一部、第二部とも、それぞれ第一論文

が人文、第二論文が社会、第三論文が自然の各領域に關

わるとも言える構成になっている。ただし、このような

構成ないし「目次」から想像されるほど、本書の内容が

実際に体系的であるわけではない。最初に引いた本書成

立の背景からも容易に推測できるように、本書は宗教学

の系統的、概論的な教科書や入門書ではなく、著者たち

が自由にそれぞれの専攻領域に引き付けながら、宗教学

的研究のさまざまな可能性を研究実例を通じて示したも

の、という性格の書物だからである。それぞれの章の標

題と内容がどの程度見合っているか、また、編者が「序

論」で示した包括的意図と構想を各論者がどの程度具体

化しているかは、それぞれ個別的に問われねばならない

であらう。

第一章で大道は、ギリシアなどの古代文明社会に一般

的な「循環的時間意識」とは異なる、不可逆で一回的な

「直線的歴史意識」がユダヤの終末論を母体として生ま

れ、黙示文学を経由してキリスト教に受け継がれたこと

を指摘し、他方でそのような歴史の本来の終末たるキリ

ストの再臨の遅延という事態が、従来の黙示文学の意味

での終末論を保持することを不可能にし、特に中世以降、

歴史の終わりに聖なるものの到来を待望することに代

わって、秘跡を中心とする礼典祭式によって、「この世に

聖なるものを臨在させる」ことに関心が移行した次第を

跡づける。これに対し、終末論の「中和化」への反動の

一つとして、大道は、特に「生来すべてにおいて抑圧さ

れていた」女性たちに希望を与えた、終末論に代わる「も

う一つの救済のストーリー」として、愛の聖化の思想を

取り上げ、その実例としてエロイーズとマリー・ド・フ

ランスの場合を挙げる。そこでは「キリストを中心とし

た人類の救済の歴史が、愛人を中心とした個人の救済の

歴史に写し取られて」いる。それは、「中和化された救済

史、世俗化された信仰形態に対して〔愛を通じて〕世俗からの聖性復元をはかる宗教的意義申し立て」でもあった。その後論文の後半は、直線的歴史意識が近代になって科学革命を体験し、進歩史観へと変質してその母体であったキリスト教の摂理観と衝突するに至ったことと、そのような進歩史観の問題性への指摘で終わる。前後の歴史意識の記述の部分が、よくまとまっているがやや図式的で、よい意味で常識的であるのに対し、中間の「愛」の思想についての部分が俄然雄弁で精彩を帯びるのは、大道がエロイーズ研究の専門家であるからに他ならない。しかし、まさにその部分で、章の主題であるはずの歴史意識の問題がほとんど欠落してしまふのは皮肉である。本来世俗的な世界に属する恋愛感情の聖化が宗教生活の世俗化を打ち破る力となりうるといふ発想は、「聖と俗の交錯」を考える上でユニークで有意義であるが、個人的な愛の「物語」を「ストーリー」という曖昧な用語で「歴史」と媒介させて（たしかにフランス語で言えば両者は同じであるが）、「歴史意識と宗教」の章で扱うのは、やはりやや無理な面があるのではないか。

第二章で宇都宮は、「社会の總体的把握を志向」し、しかも「宗教が社会思想の不可欠で本質的な構成要素となつている思想家」として、「サンシモンとデュルケムを一つの流れの中でとらえる」ことを試みる。一方で宇都宮は、これまでもつぱらマルクス主義の立場から空想的社会主義者などと過少評価されてきたサンシモンが、実証的社会学の先駆者であるばかりでなく、分裂の危機に瀕しつつある近代の産業社会を統合する原理としての宗教の機能と意義に注目した点で、デュルケムの先駆者であり、同時に「宗教の未来についての議論」としての世俗化論という「現代宗教学の焦眉の課題」をも先取りする、独創性と現代的視点を持った社会思想家であったことを論証し、その再評価を試みる。他方で宇都宮は、デュルケムがサンシモンの社会統合原理としての宗教観を発展させつつ、社会を「信念共同体」として意味づけ、そのような社会の統合を表現し、かつ形成するものとしての宗教の機能を解明したことを指摘しただけで、その宗教によって表現されるものが、実は「集合意識」という、自覚されることも反省されることもない

「暗黙知の巨大な総体」であり、それがさらに、さまざま要素とその相互作用からなる社会構造によって規定された「多層的」なものとしてとらえられていることを示し、いわばデュルケムのユング的側面を垣間見させる。宇都宮の解釈は、サン＝シモン論とデュルケム論の双方に関して、両者の結び付けを含めて、従来あまり注目されてこなかった新しい理解の可能性を開いたものとして十分に評価されてよいであろう。ただし、「教会」としての社会の統合と宗教の関わりの問題に論議が集中したために、『聖と俗の交錯』という本書全体の主題との関連で見るとき、デュルケムの宗教観のもう一つの本質的要素、すなわち「禁忌によって保護され隔離されたもの」としての「聖なるもの」と、それから「遠ざけられるべきもの」としての「俗なるもの」との関係の問題の扱いが、どちらかといえば付随的なものに止まってしまった（例えば、祭儀による社会の意識と感情の集中の時期と、それ以外の弛緩の時期についての論議等）、という印象は否めない。

第三章の著者、今井にとつては、宗教と科学の闘争な

いし葛藤そのものがある意味で「聖と俗の交錯」に他ならない。近世初頭には、ガリレオ裁判に見られるように宗教が科学を批判する側であったが、一九世紀後半以降は科学の飛躍的進歩を経て攻守が逆転し、科学の宗教批判が展開された。しかし今井によれば、現代ではホワイトヘッドに見られるような両者を止揚しようとする立場や、クーンのパラダイム理論、ファイヤアーベントの理性批判などを通じた自然科学的認識の相対化の試みが現れ、宗教と科学のある種の「棲み分け」ができてきた。次に今井は、近代に科学者たちによって真面目になされた心靈研究や、無意識の発見以降の精神分析学の例を挙げて、人文・社会諸科学の場合には、科学的なものと宗教的なものの関係が一見した以上に複雑に入り組んでいることを示し、さらには代表的な実証主義者、経験論者とされる物理学者マツハの思考に「西欧神秘主義の思考様式に通ずるもの」が内在していることを指摘する。そして今井は、そのような個々の科学者の「思想的背景」をむしろ肯定的に評価し、そこに「科学思想と宗教との実りある接点」ないし「交流の可能性」を見出すのであ

るが、このことはクーンのパラダイム理論を好意的に引用しつつ、人間の精神的働きの多元性を尊重する今井の立場からはむしろ当然であろう。ただし将来におけるそのような科学思想と宗教の「交流」が具体的にどのような形を取り得るのかについては、残念ながらここでもいま一つはつきりしない。

第四章担当の佐々木は、言葉という「人間のコミュニケーションの基本的媒体」における「聖と俗の交錯」を論ずるに当たって、「あらゆる言葉は潜在的に宗教的になりうる」という原則から出発し、さらに、平凡で「瑣末」でさえある日常的な言葉が、ある言述の中で、「いかに宗教的な言葉へと変容していくのか」という問いを立てる。ただし、「言葉と宗教」と題されたこの章は、必ずしもこの大きな問いに直接明確に解答するわけではない。なぜならその内容の大半は、佐々木の専門とする新約聖書の福音書研究における、テキストや伝承の歴史の起源に「執着」する従来の歴史的批評的研究とは問題意識と方法を異にする、「共時的」研究の紹介とその意義擁護に当てられているからである。そこではリクールの解釈学やヤコ

ブソンのコミュニケーション・モデル、チャットマンやジュネットの物語分析モデル等の新しい言語学や文芸学の理論を応用して、「テキスト世界の自律性」とメッセージの「独自の価値を持つ対象としての独立性」を尊重しつつ、現在あるテキスト全体を「あるまとまりをもったもの」として扱う可能性が示される。最近の旧・新約聖書研究の一分野において、ここで言われるような共時的、文芸学的方法が積極的に試行され、聖書の学問的理解に顕著な成果を挙げていることは事実である。しかし佐々木はこの新しい方法の意義を力説するあまり、従来の通時的研究との間の「根本的な思考法の断絶」や両者の「調停」不可能性を強調しすぎているように思われる。聖書テキストが歴史的、社会的形成物である限りにおいて、その歴史的・批判的研究の意義は失われていない（最近の編集史的研究や文学社会学的研究の充実ぶりを参照）。少なくとも、後者がもつばら恣意的な「推測」や「推定」に基づくものであり、「一九世紀の歴史主義」に「毒された」時代錯誤的なものであるかのように言うことは、聖書学の現状に対して公正とは言えない。共時的・文芸学

的方法を応用している研究者の多くも認めているように、二つの研究の方向は、聖書のテキストという複雑で多元的な問題をはらんだ対象の相異なる局面を説明するものとして、相補的、総合的に用いられていく必要があるろう。

第五章の櫻井は、世俗化を「近代化の過程において宗教が社会のさまざまな領域でその影響力を失っていく社会変動の一側面」と定義し、それを「社会学的概念として精緻化する」ために、ベラー、ハモンドの「市民宗教論」や、パーソンズ、ルーマンの社会システム論、ルックマン、バーガーの現象学的社会学の理論等を応用し、一方では多元化した近代社会において宗教に代わる社会統合の機能を担うことになった法制度や公共道德等の本来的には「世俗的な秩序」が「再聖化」される傾向が見られることを示し、他方では社会システムの分化・複合化がサブシステムとしての宗教の個別化、特殊化や「私化」を促すとともに、社会統合が分化したサブシステム間の相互依存性によって達成されることになり、宗教が社会的問題解決への影響力を失うようになった次第を明らかに

にする。社会学者である櫻井が、もっぱら宗教の社会統合機能を中心に論ずるのはむしろ当然であり、世俗化はその機能の喪失として定義する限りにおいて、彼の論述はきわめて啓発的である。しかし「世俗化」という概念には、ボンヘッフアーやコックスが示したように、宗教が彼岸から此岸に関心を転じつつ、この世界の現実的諸問題に積極的に関わりながら変容していくという意味も含まれることと、宗教学的には「聖」の観念が、宗教固有のカテゴリーとして、社会の統合機能に還元され得ない非合理（ヌミノーゼ的）な側面を持つことをも指摘しておきたい。

第六章で、看護学と生命倫理を専攻する沢田は、医学の急速な進歩が脳死、臓器移植、遺伝子操作、超高齢化、機械的延命等のさまざまな新しい倫理的・社会的問題を生み、「生命の意味や人間の尊厳について再考させる機会」を提供したことを指摘したうえで、ターミナル・ケア（終末期医療）を中心問題として取り上げ、単なる身体の「治療」でなく、人間全体の「癒し」を可能にするために、医療が宗教的価値を再考すべき必要性を強調す

る。そして主としてキリスト教と仏教に関して、それぞれ、隣人愛や利他の思想を基盤としつつ、病人看護や死にゆく人々への看取りが宗教活動の一環としてどのように行われてきたかについて、歴史と現代からいくつつかの事例を挙げ、「医療と宗教が触れ合った真の癒し」がどのようにして成り立ち得るかを示す。沢田の論述は、きわめて現代的で嚴肅な問題を正面から取り上げ、かつそれを誠実に扱ったもので、感銘深い。ただし再び『聖と俗の交錯』という本書全体の主題との関連で見ると、沢田自身も触れていることであるが、宗教活動の一環として行われる看護活動と、そうでない「人類愛やヒューマニズム」に基づくそれとの共通性と相違についてのよりいっそうの掘り下げが必要である。ここでは「宗教的なもの」が、「他者を気づかう心の重視」といった程度の一般的なものに還元され、希薄化されてしまっている面があるからである。

以上、非常に不十分なまとめと感想しか記せなかつたが、六つの論文はいずれも力作であり、それぞれの著者の専門に関わる力量をいかに発揮したものである。

ただ、序論に示された編者の意図が全体に有効に貫徹されているかや、書物としての統一性を振り返ると、多少の問題点も感じられる。一つには、主題である「聖」と「俗」についての著者たちのとらえかたが、必ずしも一致してはいないように思われる。第二に、それと密接に関連することだが、編者の土屋自身を例外として、著者たちの多くは、序論で土屋が強調した「独立した学問としての宗教学」プロパーを専攻する研究者ではない。これらことから、一冊の書物としてはむしろ多様性の方が強く印象づけられ、副題である「宗教学とその周辺」の方が本書全体の性格をよく表現している、という感を抱いた。この点で、「不透明な境界領域から逆に中心部分を照射」するのだ、と主張する編者の言葉（序論）には、若干の苦しさや開き直りの気持ちもこめられているように思われる。（本文中敬称を略した）